

タイ湾沈船積載陶磁器の調査

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/2840

調査紹介

タイ湾沈船積載陶磁器の調査

向井 互（大学院社会環境科学研究科）

1. 調査に至る経過

筆者は、2000年8月1日～30日、タイはチャナライ水中考古学局（以下水中考古学局）でタイ湾沈船積載陶磁器の調査を行った。その経過と成果の一端を紹介する。

調査開始の契機は、佐々木達夫教授に今年9月に開催された第21回貿易陶磁器研究集会において、タイ湾沈船積載陶磁器の発表機会をいただいたことにある。筆者は、タイ芸術局刊行の報告書や博物館に陳列されている陶磁器のガラス越しの観察では不十分であると考え、タイはシラパコーン大学スリン教授に推薦状を頂き、調査に至った。発表の詳細については(野上、向井2000)を参照のこと。

2. 目的：東南アジア地域編年軸の作成

調査目的は、沈船資料と窯跡発掘成果に基づくタイ輸出陶磁器の編年案作成である。編年案作成にあたり、標準遺物をシーサッチャナライ施釉陶磁器にもとめた。理由は、(1)窯跡発掘成果から陶磁器の変遷の大枠が把握できる。(2)東南アジア全域とアジア各地の遺跡、そして沈船から多量に出土。(3)操業期間が14世紀後半～16世紀末と長期間。標準遺物に加え、さらにノイ川窯黒褐釉陶磁器四耳壺やスコタイ釉下黒彩陶磁器の盛衰を組み合わせ、14世紀後半～17世紀代の東南アジア地域編年とした。近年、日本中世城館遺跡や港湾遺跡より、東南アジア陶磁器の出土事例が報告されるようになった。出土東南アジア陶磁器の理解には、正確な制作地と生産年代の同定が不可欠である。しかし日本では、タイ、ベトナム陶磁器を茶器として珍重したこともあり、伝世の可能性を考慮すると日本出土事例から正確な生産年代推定は困難である。

沈船積載陶磁器が編年研究に果たす役割は大きい。つまり、その一括性と中国陶磁器の共伴事例から年代推定が可能である。また、東南アジア発見の沈没船の多くは、様々な窯の陶磁器を混載して発見されることが多く、同時期に如何なる陶磁器が流通していたかを知らぬ重要な資料となる。

3. 調査

タイ湾では多数の沈船が発見される。調査に際し、以下の条件を満たす沈船の積載陶磁器を抽出した。第1に、中国陶磁器とシーサ

チャナライ陶磁器が積載されること。第2に、水中考古学局に1隻の沈船積載陶磁器として比較的多数の陶磁器が所蔵されるもの。第3に、船体などの発掘状況が明らかにされているもの。しかし、これらの条件はあくまでも原則である。すなわち、水中考古学局に所蔵される積載陶磁器は全体の極一部であり、多くの資料は所蔵スペースの狭さから各地の国立博物館に分蔵されているのである。この条件のもと、5隻の沈船積載陶磁器の調査を行った。

積載陶磁器は、タイ陶磁器以外に、中国陶磁器・ベトナム陶磁器がある。生産地を列挙すると、中国陶磁器（浙江省龍泉窯青磁・江西省景德鎮窯青花磁器・福建地域褐釉陶磁器）、タイ陶磁器（シーサッチャナライ窯・スコタイ窯・ノイ川窯・バンブーン村窯）、ベトナム陶磁器（チュウダオ窯・ゴサイン窯・ゴカイメイ窯）、産地不明。

積載陶磁器の年代推定に重要な資料は中国陶磁器である。中国陶磁器の年代比定は、中国紀年銘墓出土資料や日本中世遺跡出土事例が根拠となる。さらに、1980年代のシーサッチャナライ窯跡発掘成果が施釉陶磁器の変遷に重要な手がかりを与える。

4. 調査成果 - 輸出タイ陶磁器の編年案概要 -

タイ陶磁器の沈船積載最古事例(ランクイエン沈船)は14世紀後半～15世紀初めに年代比定されるシーサッチャナライ青磁とバンブーン村窯無釉陶磁器である。シーサッチャナライ青磁は、素地は粗く、色調は茶褐色。素地上に化粧土をかけ、その上から施釉。窯跡発掘成果では最古期施釉陶磁器に位置付けられ、MON陶磁器と呼ばれる。

15世紀前葉(シーチャン島沖沈船2)には、シーサッチャナライ釉下黒彩陶磁器と青磁が確認できる。釉下黒彩陶磁器は、素地がMON陶磁器よりも細くなり、灰褐色。素地上に化粧土をかけ、化粧土上に黒彩文をあらわし、その上から施釉。この時期に出現するスコタイ釉下黒彩陶磁器も同様の技法である。スコタイ陶磁器の黒彩文は草花文が主体である。シーサッチャナライ青磁は、素地は細くなり、灰白色となる。素地上に直接釉薬をかける。これとは別に、黒褐釉陶磁器はMON陶磁器の素地と同じ特徴を有する。上記の特徴を有するシーサッチャナライ・スコタイ陶磁器は遺跡出土事例が少ない。

15世紀中葉(クラム島沖沈船)、シーサッチャナライ陶磁器は青磁が主要を占める。素地

は細かく、灰白色、素地上に直接施釉。この時期の青磁の釉薬、素地、そして装飾技術は最高水準に到達する。スコタイ陶磁器は釉下黒彩陶磁器の生産を継続するが、その意匠は15世紀前葉の草花文と異なり、魚文が多用される。上記の特徴を有する陶磁器は、東南アジア各遺跡から多量に出土する。ここから、タイ陶磁器の本格的輸出は、15世紀中葉以降であると推定できる。また、コンテナ陶磁器として18世紀まで大量生産されたノイ川窯黒褐釉四耳壺がこの時期に出現することも注目すべきである。この時期の日本には、特に沖縄からまとめてタイ陶磁器が出土している(首里城・勝連城)。

16世紀前葉(クランアオ沈船)、シーサッチャナライ陶磁器では青磁が主要を占めるが、その品質や装飾は15世紀中葉に比べ低下する。近年発表されたフィリピン、レナ沈船から、シーサッチャナライ青磁の品質は15世紀末には既に低下していた。シーサッチャナライ青磁の他、白濁釉陶磁器もみられる。ノイ川窯では黒褐釉四耳壺以外にも多種多様な器種の黒褐釉・無釉陶磁器が生産される。その主要は壺・鉢・瓶類であり碗皿類は極僅かである。

16世紀後葉(シーチャン島沖沈船1・リン島沖沈船・クラダット島沖沈船)の資料については、極一部の資料を実見したにすぎないが、芸術局作成の実測図を水中考古学局において複写することができた。現在資料整理中であるが、シーサッチャナライ陶磁器には青磁(16世紀前葉と変化無し)に加え、釉下黒彩陶磁器が確認できる。この陶磁器は、いわゆる宋胡録として日本で珍重された類であり、合子や小瓶などが確認できる。ノイ川黒褐釉四耳壺には、これまでの短い頸部を有する系統に加え、頸部を有さない肩部に白泥をかける新たな系統が加わる。この類が堺・長崎・博多などで多量に出土する四耳壺である。頸部を有する系統は16世紀末に姿を消すが、頸部を持たない新たな系統は、18世紀前半(インドネシア・リズダム沈船)まで継続する。シーサッチャナライ陶磁器が見られるのも16世紀末までである。

5. 今後の課題

今年の夏季調査以降、更に新たに2隻の沈没船積載陶磁器のカタログが刊行されている。1隻は、ベトナム中部ホイアン沖合のクーラオチャム沈船(15世紀後半)であり、もう1隻はフィリピンで発見されたレナ沈船(15世紀末～16

世紀初)である。このような新たな資料の追加と共に、今回調査を果たすことのできなかつた国立博物館所蔵資料の追加調査を行い、四半世紀単位で輸出タイ陶磁器の編年案を作成したい。

一方で、沈船積載陶磁器は、当時の物資の海上運搬方法を表す重要な資料でもある。陶磁器は、製品として取り引きされた陶磁器だけではなく、物資を船に積載する際にコンテナとして機能した側面もある。特にタイ陶磁器には、ノイ川窯黒褐釉四耳壺にみられるコンテナ機能が重視されるべきである。今後は、製品としての陶磁器研究に加え、コンテナ陶磁器の視点に立ち海上運搬と陶磁器の関わりにも注目したい。その際、沈船積載陶磁器は新たな姿を示すと考えている。

参考文献

野上建紀、向井互 2000「東南アジア周辺の沈船遺跡 南シナ海・タイ湾を中心に」『日本貿易陶磁研究会 第21回研究会資料集「陶磁器研究の現状と年代観」 近年の東アジア出土の一括資料を中心に』東京